

京丹後市袖志地区における水と暮らし

～シミズ、カワ、イケ、イネの調査を通して～

田中靖子

京都府立大学大学院・生命環境科学研究科
三橋俊雄

袖志の棚田（400枚）が、1999年に農林水産省の「日本の棚田百選」に認定された。

水と暮らし：水場

- 食としての水
- 洗濯などの生活用水
- 農耕のための水
- 物資を運ぶ交通としての水
- 漁撈の場
- 遊びの場
- 非常時の防災
- 日常生活空間を豊かにする水

- 飲料には早朝の澄み切った流れを汲み、洗ひ物にも次々の順序をきめて、下流に住む人の迷惑にならぬやうな、不文の約束が守られて居た。

柳田国男、柳田国男集第二十一巻429頁「井戸と川戸」より

- 生活に密着した水は集団社会にルールをもたらし、それを共有することで社会的秩序が保たれていた

目的

本研究では、京都府京丹後市袖志地区を取り上げ、生活における水利用のあり方について、シミズ、カワ、イケ、イネと呼ばれる水資源を対象としてそれらの役割・機能、空間的特徴・構成、場の意味などの側面から、水場の、地域の暮らしとの関係性を明らかにし、エコミュージアムとしての資源的価値について考察する。

既往研究

- 渡部一二、生きている水路—その造形と魅力、東海大学出版会、186・12-15、2003
- 伊藤 毅、水辺と都市、山川出版社、92-112、2005
- 陣内秀信、水辺から都市を読む 舟運で栄えた港町、法政大学出版局、254-438、2002
- 大場修、丹後地域の沿岸集落における集落構成とその形成過程に関する調査研究、2007
- 黒野弘靖、街路村における街路と水路の中心性と屋敷構えとの関係、2000
- 今里悟之、農山漁村の<空間分類>—景観の秩序を読む、太洋社、133-162、2006
- 京都府立丹後郷土資料館、農山漁村の女たち、30-37、1986
- Toshio MITSUHASHI, Yukari SUZUKI, Kiyoshi MIYAZAKI、DESIGN OF ROADS FOR SOCIAL COMMUNICATION、2001
- 渡部一二、水縁空間、住まいの図書館出版局、1993

調査対象地：京丹後市袖志地区



京都府
京丹後市



京都府



経ヶ岬

袖志

丹後半島

久美浜湾

宮津湾

若狭湾

円山川

由良川

舞鶴湾

袖志地区の歴史

- 慶長郷村帳（1600年前後）：袖石
- 江戸期から明治22年の村名：袖志村
- 宇川牛発祥の地
- 元禄時代から海女による採藻業が行われた
- 明治元年：汲美浜県に所属
- 明治4年：豊岡県に所属
- 明治4年：京都府に所属（戸数108・人口557）
- 明治22年：下宇川村の大字となる
- 昭和30年：丹後町の大字、袖志となる

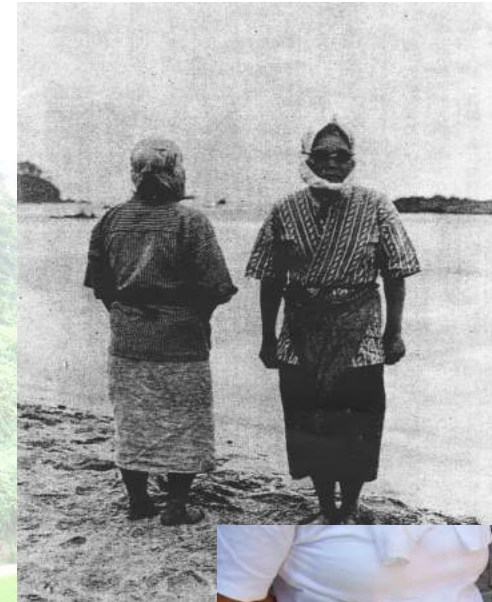
袖志地区、水関連の歴史

- 明治13年 袖志村大火災
- 明治15年 袖志村再び大火災
- 昭和20年 袖志防波堤築造
- 昭和28年 袖志分校改築落成式
- 昭和31年 袖志簡易水道竣工
- 昭和32年 尾和用水着工
- 昭和37年 丹後半島一周道路開通
- 昭和39年 袖志海岸道路完成

採藻業を支えた海女（テングサ採りの様子）

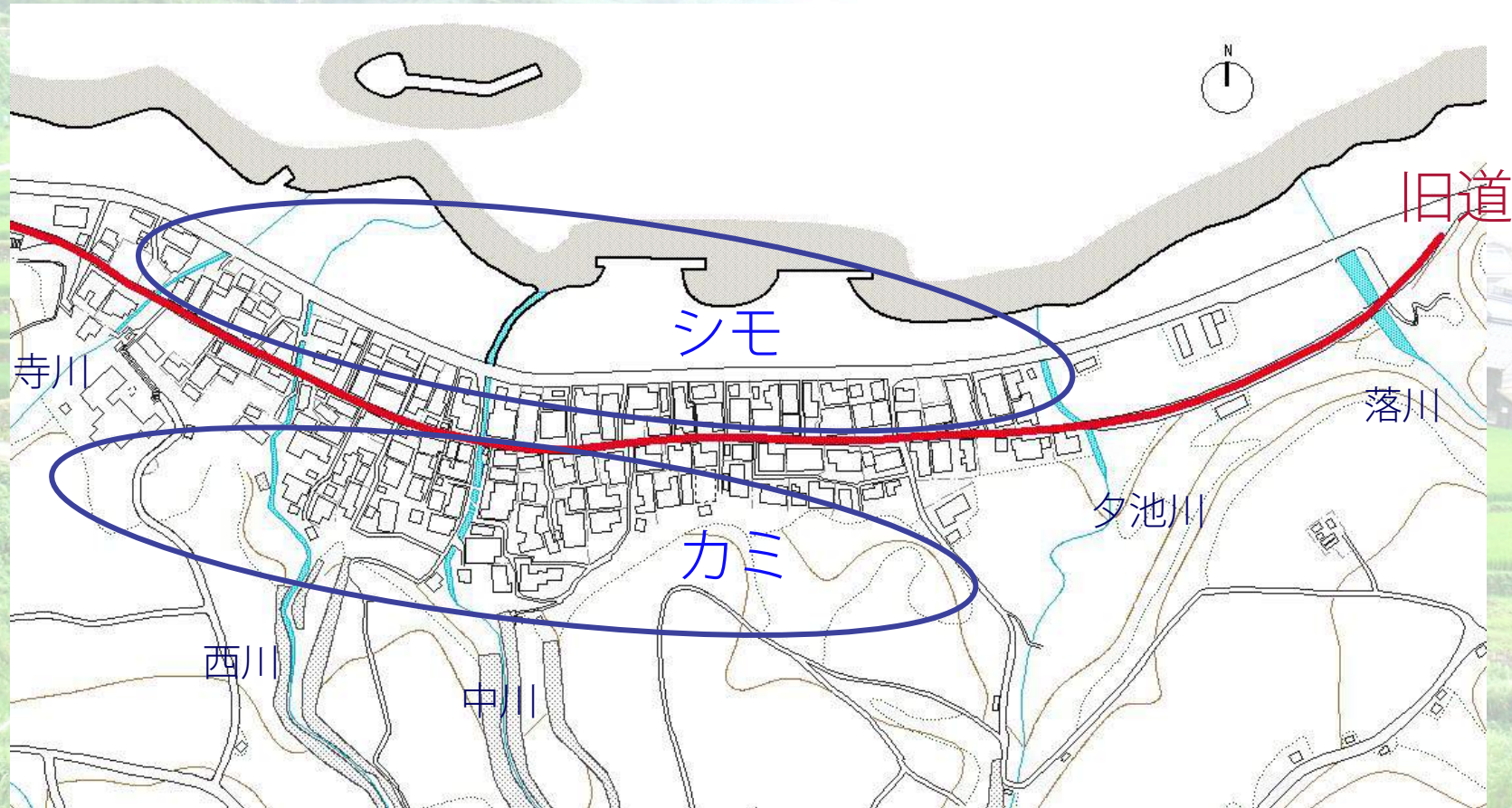
- ナサシとよぶ貝起こしのカネをもって海にもぐる。麻布をねじって縫った、米ならば一斗四、五升も入るようなスマ袋を腰につけ、頬被りをして、腰布一つでもぐった。夫が舟をやり妻がもぐる、メオト舟で若布採りなどには重くて浮き上がれないから、夫が二間くらいの長い竿を突き出して、それにつかまらせてひきあげる。
- この天草採りは昭和25年頃まで、6月上旬から7月の土用の入りまで行われた。（略）海女稼ぎに出かけても、土用（7月20日）の入までに漁を終えて帰ってきた。そして、田の除草作業が始まる。袖志の海女稼ぎは農作業との合間をぬって行われたのである。

『日本残酷物語2』・『舟と港のある風景』より



スマ袋

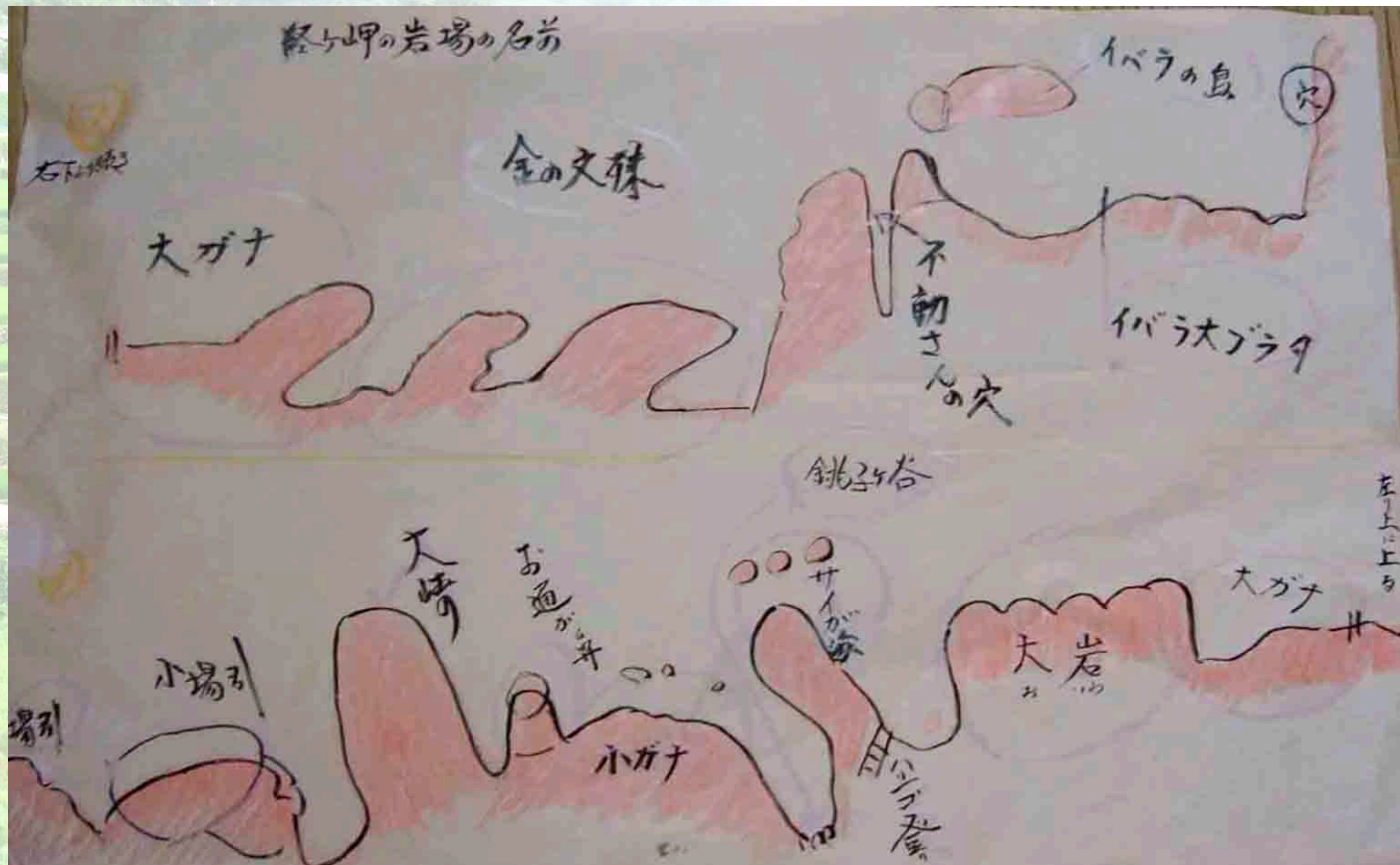
袖志地区の小字と空間概念



袖志地区の小字と空間概念



ノリ摘みの岩場に残る小字



「山の口」=11月のノリ摘みの解禁日や岩場の小字名など、集落共同体の規範が見て取れる

袖志の生業：海草・海産物の採取

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ワカメ *							天候見て、山の口開け					
アラメ *												
モズク *												
ウゴ *												
テングサ *							6月1日山の口開け					
ウニ *								土用に入って山の口開け				
ハバノリ *										山の口開け		
イワノリ *										山の口開け		
アワビ *								9月1日～11月30日まで禁止				
サザエ *												

* 皆がやっている  山の口開け(解禁日)あり



袖志の採藻業

テングサ

イワノリ採り・ノリづくりの道具



カイガラ



アジカ



スマブクロ



ナガシバコ



テツキ



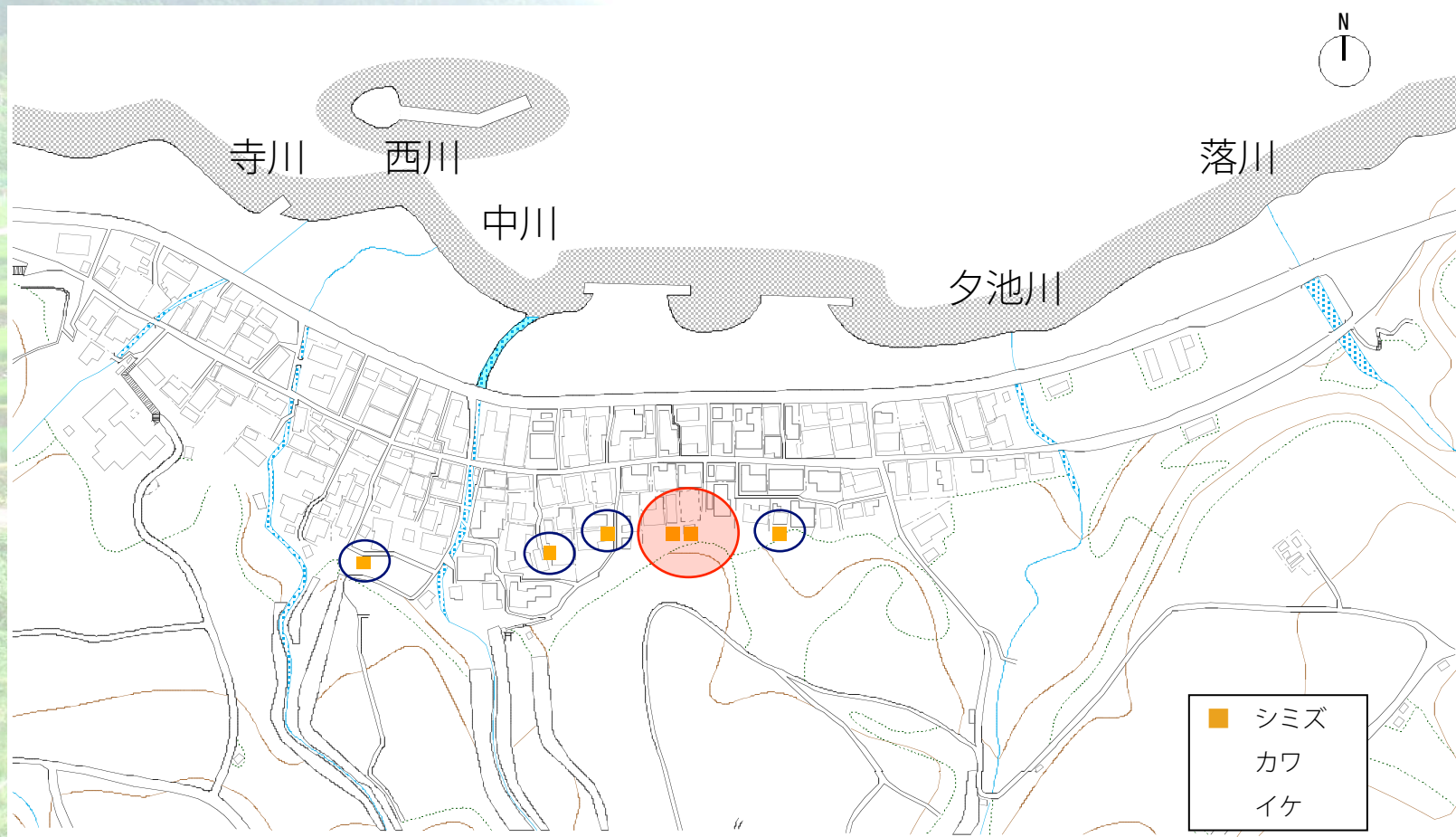
ノリハシゴ

イワノリは、海水で砂抜きした後、シミズ、カワ、イケの真水を利用してつくられる

袖志地区における4つの水資源



シミズの分布（6箇所）

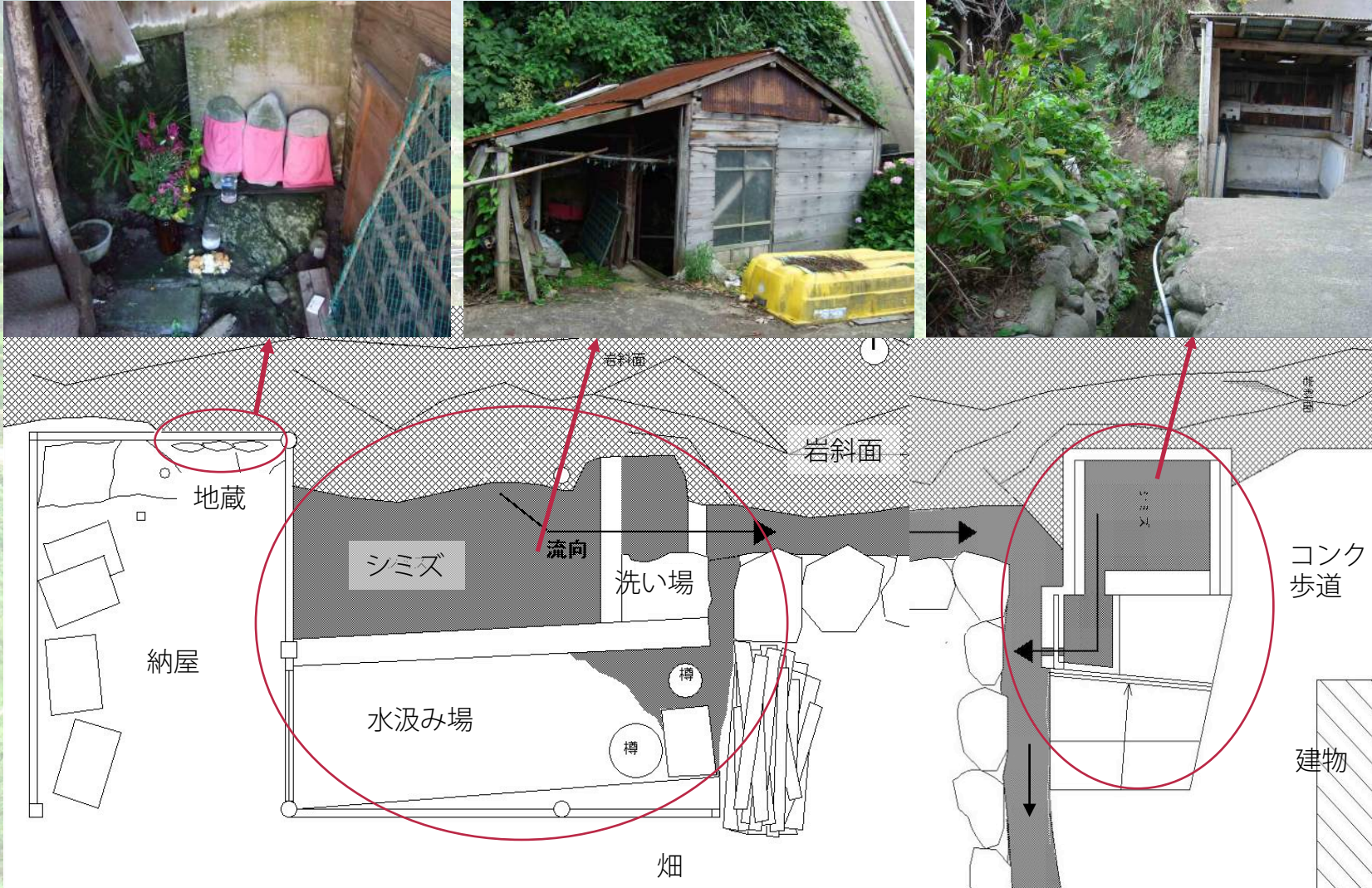


崖下のシミズは、山の斜面をコンクリートで覆う砂防工事のため消えていった

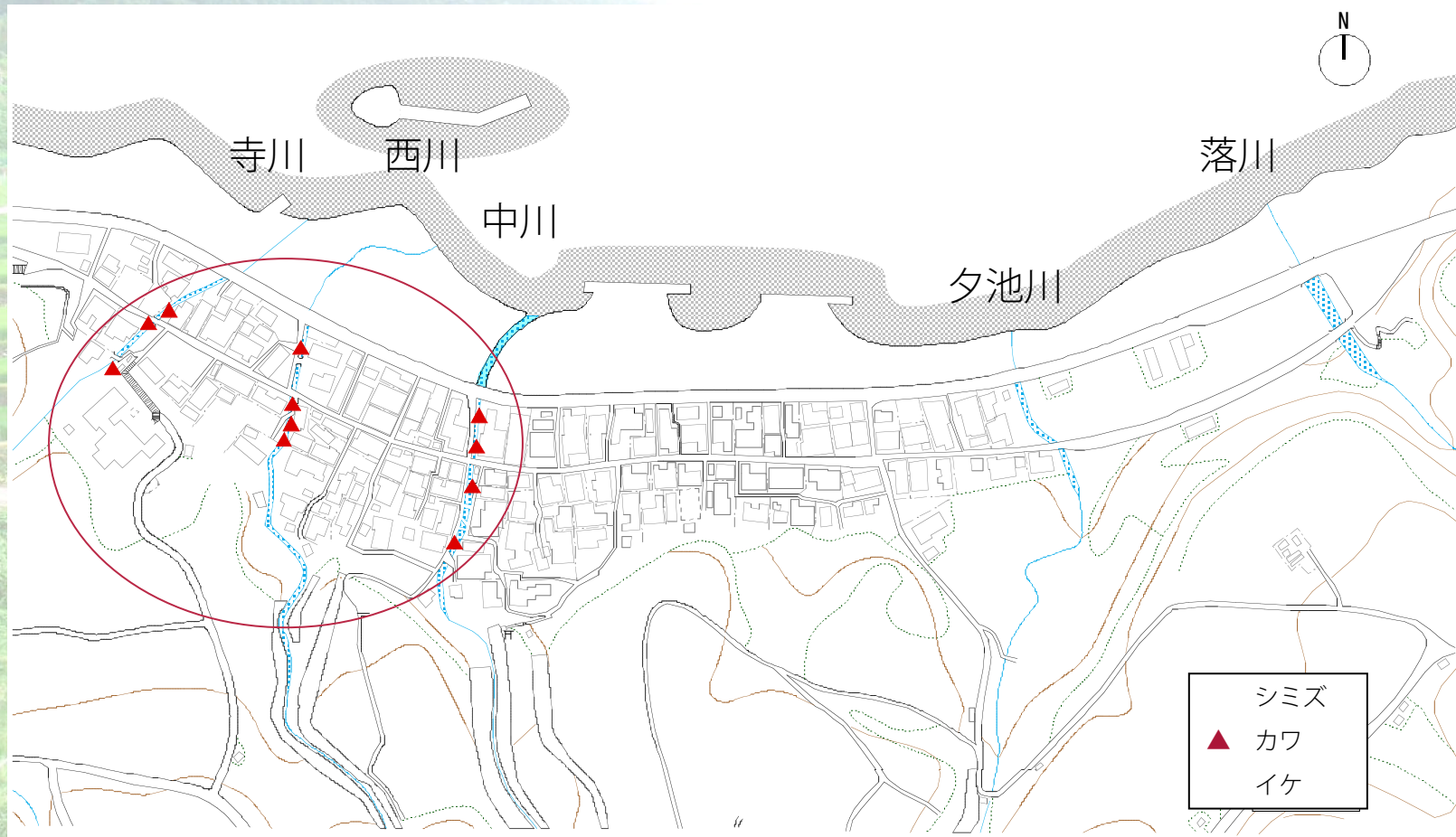
シミズ

- 山からの湧き水を利用した横井戸。
- カンダ（上田）のイケと呼ばれ、区別されていた。
- 水道が普及するまで、主に飲み水として人々に親しまれてきた。
- 年間を通して水温にほとんど変化がなく、常に15度～16度程度。夏冷たく冬暖かい水。
- スイカやマクワウリを冷やしていた。
- 飲み水の他にもお茶に使う、食器を洗う、豆腐を作る、酒を造る、などに利用された。
- お茶の生水としても利用され、湧き水をそのまま溜めている状態であるが、生水として利用することができるほど純度の高い水であった。

シミズ

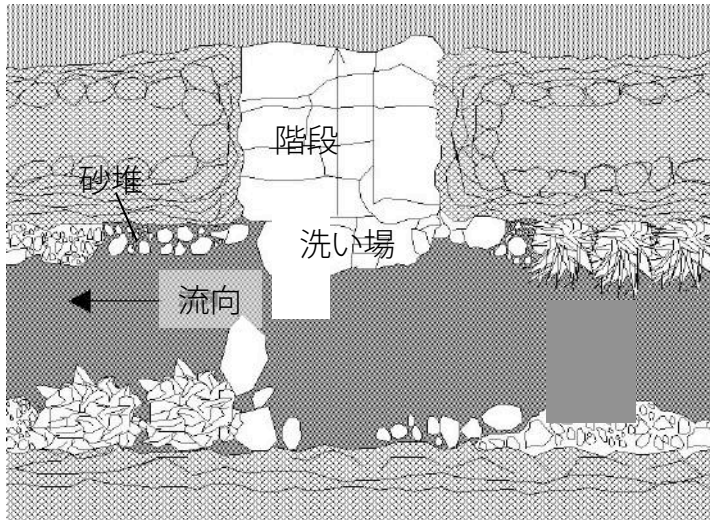
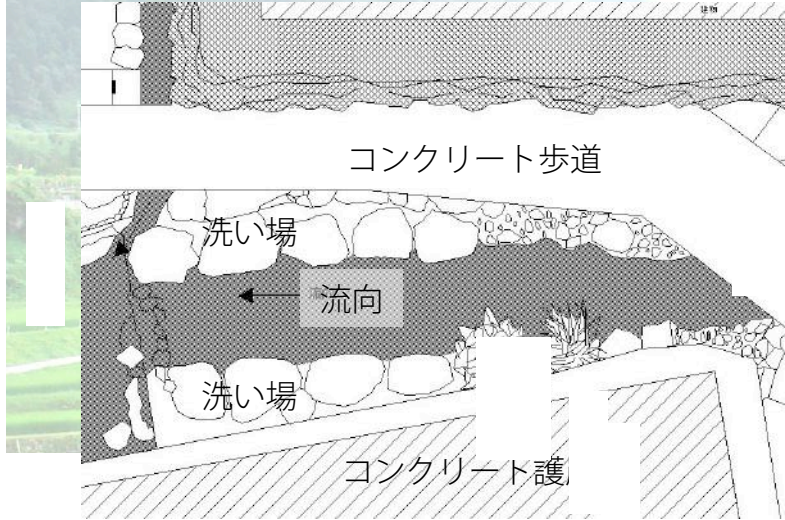


カワの分布 (洗い場11箇所)

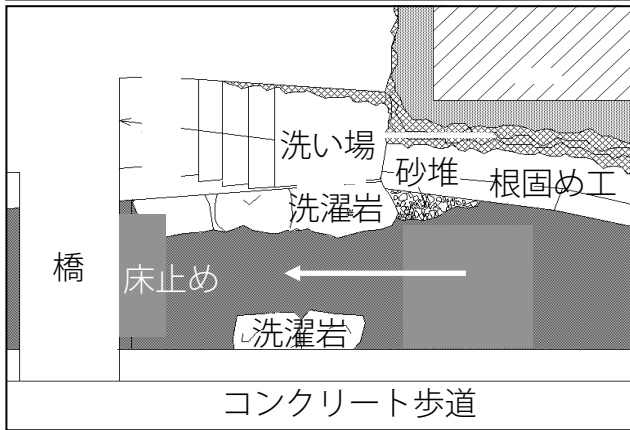
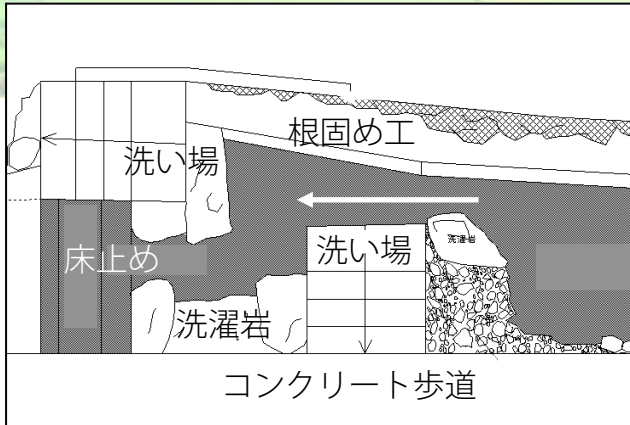
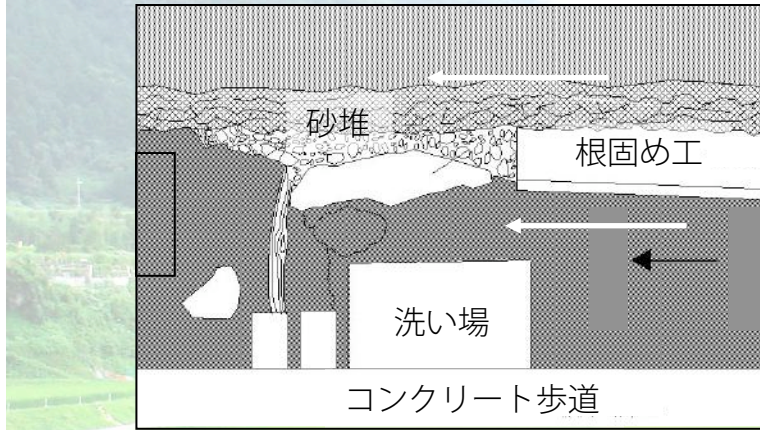


カワ

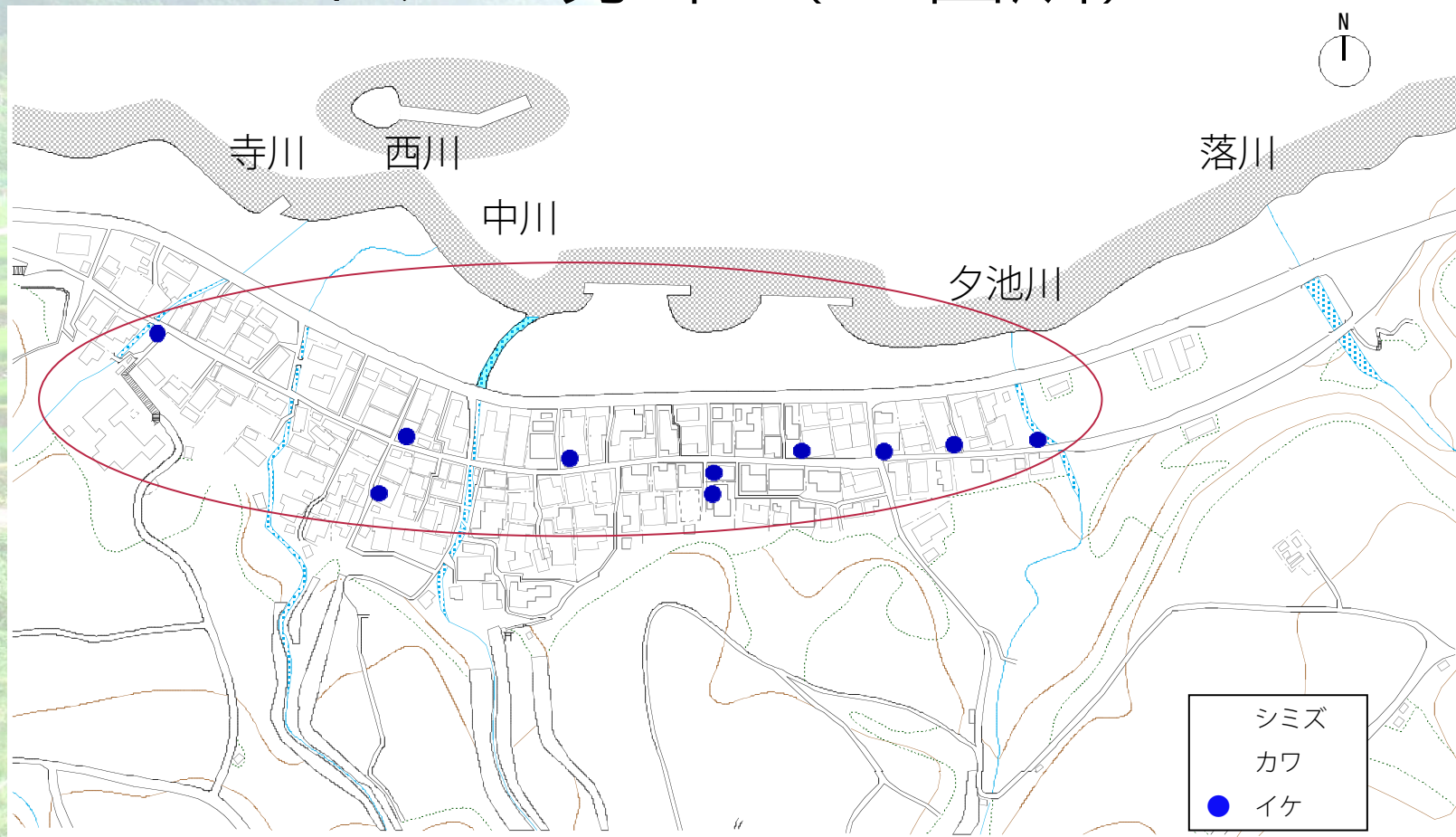
- 中川、西川、寺川が主に生活用水として利用されてきた。
- 採取したテングサやワカメ、イワノリなどをカワで洗っていた。
- 西川はテングサを洗うのに最も良いと言われていたり、隣の豆腐屋が利用し、豆腐をつくっていた。
- 飲み水、米を炊くための水、海藻を洗う水、野菜を洗う水、続いて洗濯水、最も海に近い下流ではおしめ等汚れた衣類を洗う水というように上流から下流に向かって用途によるヒエラルキーが存在していた。
- 川縁を舗装整備する以前はウナギ、アユ、モクスガニなどの生き物が見られた。
- ウナギが棲みついていた。
- 雪除けに川を利用した。



京丹後市袖志地区における水と暮らし



イケの分布 (10箇所)



昭和30年代の水道の普及で、イケはすべて埋め立てられた

イケ

- 川からの水や、山にある水脈を掘り当てて引きこんで溜めたもの。
- 主として川から少し離れている家々の人が共同で使っていた。
- 屋根が付いているイケと、付いていないイケがある。屋根のないイケは蓋をすることで塵や埃から水を守っていた。また雨や雪の降る日には、イケの前の家に住んでいる人や最後に使った人が蓋をして管理していた。
- マダケの竹筒の節を抜いて管を作り、勾配をつけることで水に流れを生じさせイケまで水を運んだ。結合部には松の木を立方体に切り、竹の管が通る程度の円柱をくり抜いたものを使った。
- 生活用水として飲み水、炊事、洗い物、洗濯、風呂水に使った他、非常時には防火用水としても利用された。

イケ



埋め立てられたイケの跡

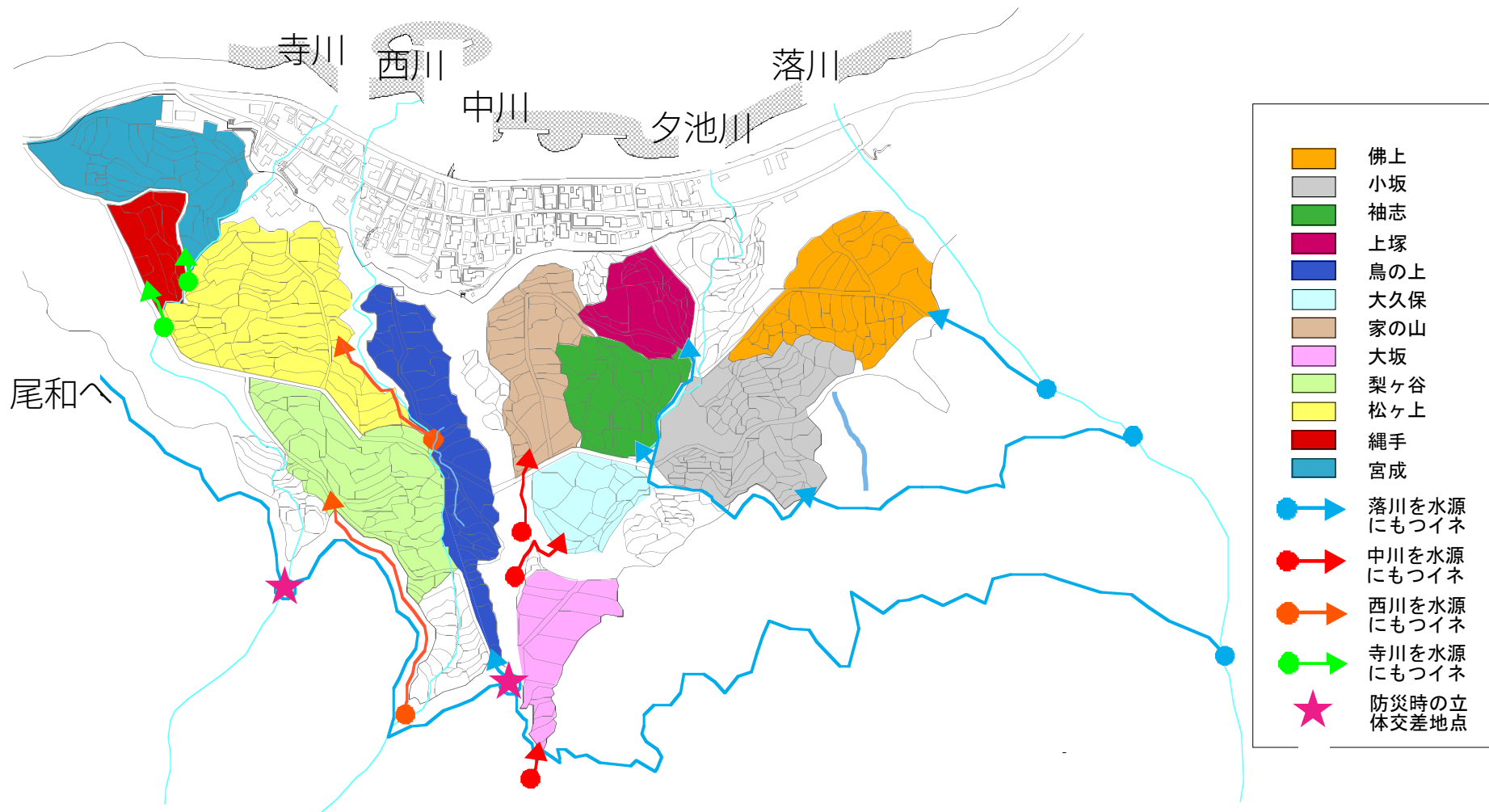
イネ

- 袖志地区では山に棚田が配してあり、棚田へと繋がる農業水路をイネと呼んでいる。
- イネは各家の所有する棚田を結んだ水路システムで、川に水源を持ち、川の上流から地形の高低差を利用して棚田に水が届くよう工夫されている。
- イネの勾配は100分の1程度。
- イネは、水源となる川に各イネの取水口（イネ口）が設けてあり、そこからある規模の面積を持つ棚田エリアにおける注ぎ口までを指す。イネは取水口からその棚田の注ぎ口までを繋げ、水路として水を運び、棚田に水を供給している。注ぎ口から流れ出た水は各家の所有する田の周りを囲っている水路へと流れる。

川を水源に持つイネの構成

集落にある5本の川のうち、落川、中川、西川、寺川の4つを水源とし、イネが形成されている。13あるイネのうち、通常袖志の棚田に水を供給しているイネは尾和イネを除いた12のイネである。

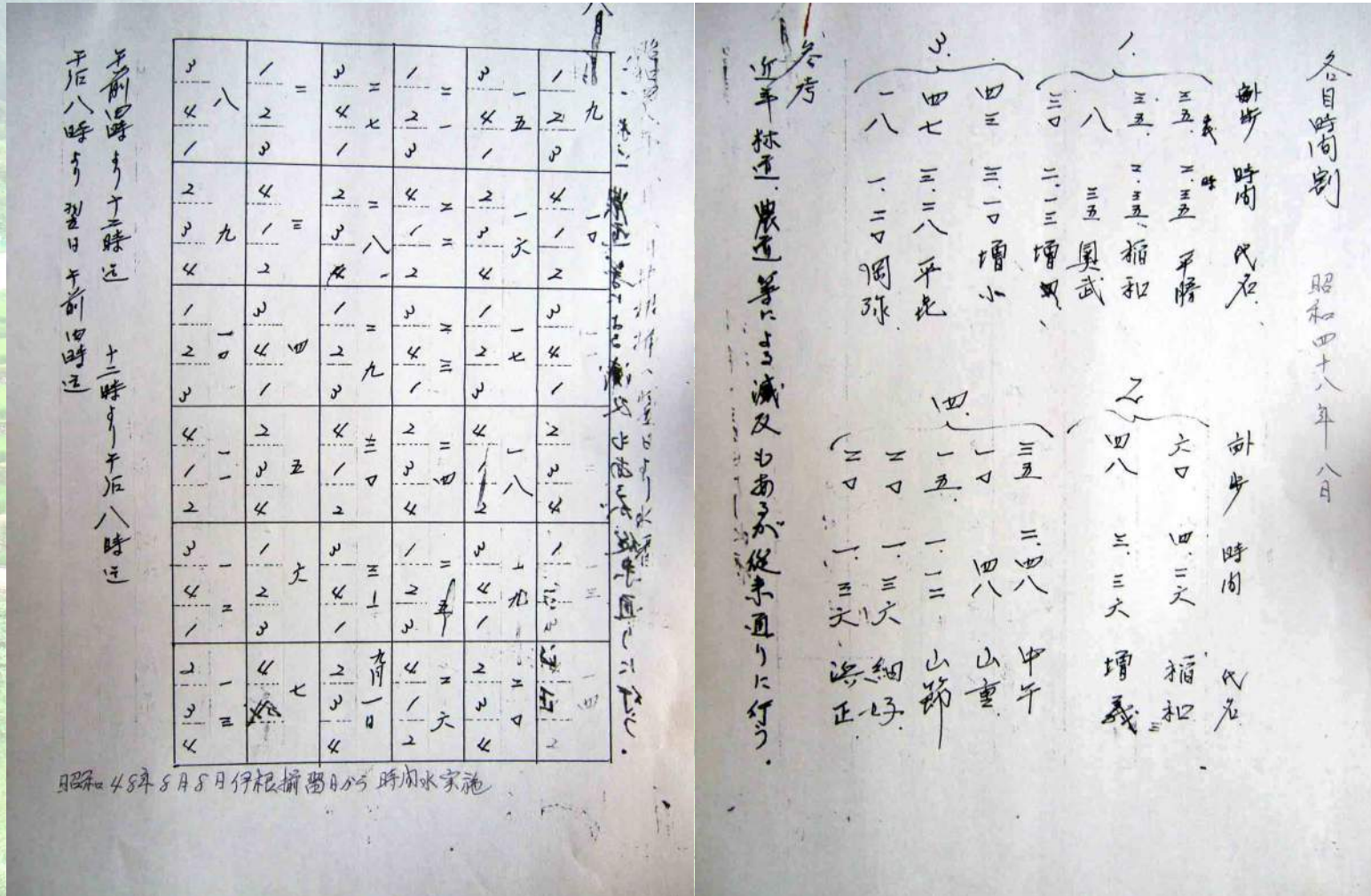
水 源	イネ
落 川	袖志イネ、仏上イネ、上塚イネ、小坂イネ、鳥の上イネ、尾和イネ
中 川	大坂イネ、家山イネ、大久保イネ
西 川	梨ヶ谷イネ、松ヶ上イネ
寺 川	宮成イネ、縄手イネ



イネの管理と利用法

- 小字別の区域に配置されている田全体を担う一つのイネが、各棚田に水を供給しており、そこに流れる水路、つまりイネを共同で使っていることになる。
- 棚田の面積に応じて所属するイネに出資することで、水利権が得られる。
- イネごとに共同管理が行われ、「イネそろえ」といって、共同で自分の所属するイネの草刈をしたり、崩れを直したりしている。どのイネも大抵6月には1回イネそろえを行うことになっており、イネによって最低年に1回もしくは2回行うことが決まっている。
- 出資金額に応じてイネの利用時間が決定し、分けられた組による交代制になっており、それが循環して順番に水が供給されるようになっている。

京丹後市袖志地区における水と暮らし



仏上イネの時間別水利用

尾和イネ

- 袖志と西隣の尾和集落を繋ぐイネ。
- 袖志にある13のイネの中で最も長い。
- 尾和イネがまだ実際に使われていた頃は、田植えの時に使う農業用水として利用されていた。当時は山の斜面を利用して尾和にある2つの溜池まで送っていた。
- イネを尾和まで引いて水を貸す代わりに、尾和イネからの落とし口を袖志の棚田に20~30数個設け、袖志が水不足に陥っても米が栽培できるようにした。
- 昭和37年に尾和水路が完成したことによって、昭和43年に尾和イネの地権を尾和から袖志へ返還した。

防火用水として機能した尾和イネ

落川にある尾和イネの堰（せき）を開く



尾和イネと中川（西川）との立体交差地点にあるイネの側板を外し、下を流れる中川（西川）に水を落とす



中川（西川）と旧道との交差地点にある堰止め板をはめ、水を貯める



消防ポンプで水を汲み上げる



尾和イネと中川の立体交差

水資源と用途

用途	目的	シミズ	カワ	イケ	イネ
洗う	食物	×	○	×	×
	衣類	×	○	×	×
	海藻	△	○	△	×
水を汲む	飲み水	◎	○	○	×
	お茶の生水	◎	○	×	×
	米を炊く	○	○	○	×
	風呂水	○	○	○	×
	水遣り	○	○	○	×
冷やす	野菜・果物	○	×	×	×
ふれあう	水遊び	×	○	×	×
	談話	○	○	○	×
緊急事態	雪流し	×	○	×	×
	防火	×	□	○	□
産業	酒造	○	×	×	×
	豆腐づくり	○	○	×	×
農業	稲作	×	×	×	○
	畑	×	×	×	○

○：利用のあるもの

×：利用の無いもの

△：利用はあるが直接

水場に接さない

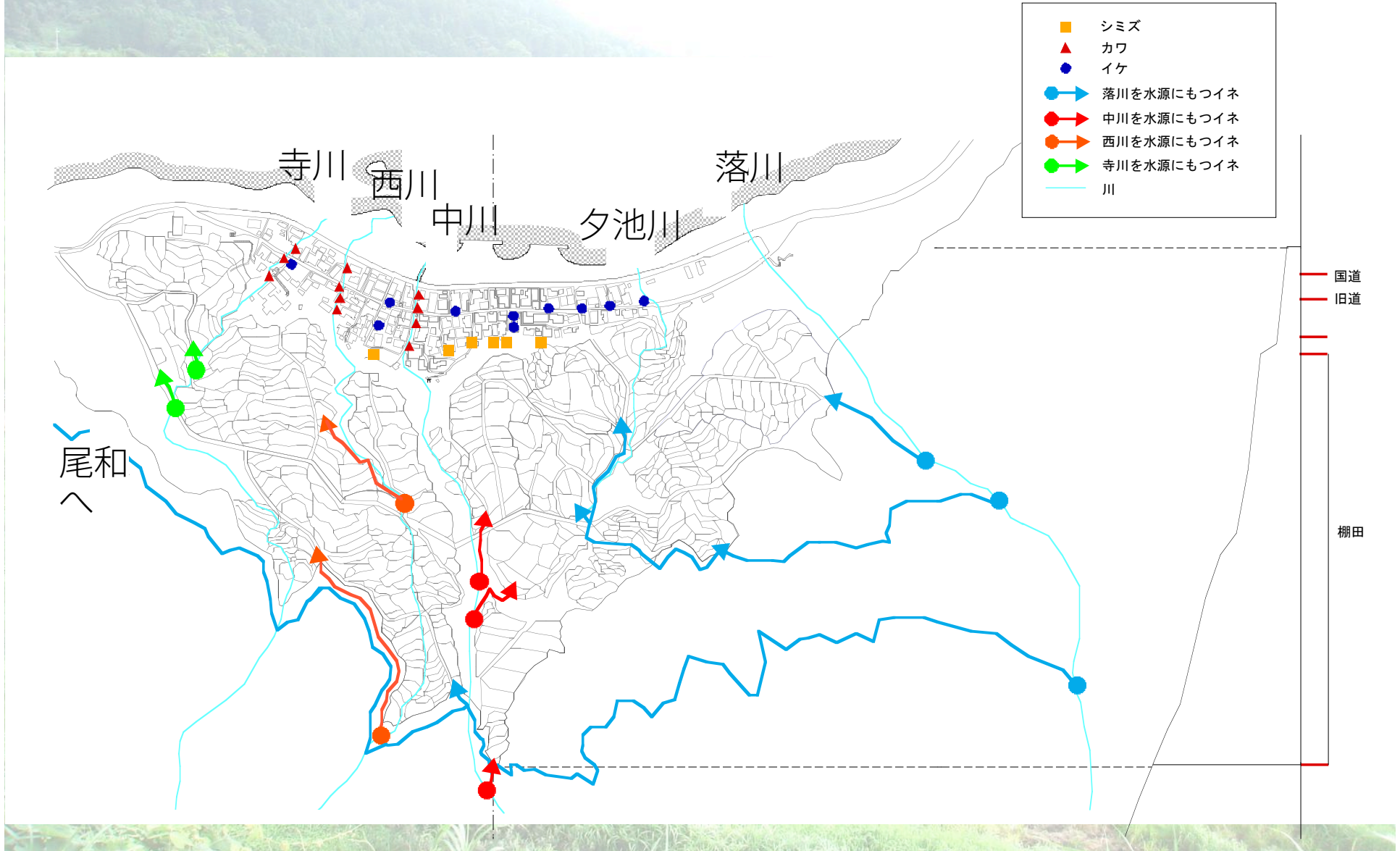
◎：特に利用されたもの

□：相互的作用として働

くもの

袖志地区の水資源と空間構成

- シミズ
- ▲ カワ
- イケ
- 落川を水源にもつイネ
- 中川を水源にもつイネ
- 西川を水源にもつイネ
- 寺川を水源にもつイネ
- 川



●自然と共生する水利用の技

人々はカワの他に人工物であるイケやシミズを作った。それらは川や山の水脈から水を引いてくることで、より便利に水を供給できるシステムを作り出した。また全ての棚田に水が行き届くようにゆるやかな勾配を考慮してつくられた農業水路であるイネを生み出した。与えられた自然環境の中で、それらを最大限に利用しつつ、生活に役立つ水利用の技を生み出した。

●生業を支えた水

袖志の海女に代々受け継がれてきた採藻業は古くからの生業であった。採って来た海藻は、テングサにしてもイワノリにしても真水で洗う。イワノリはそれを洗う工程から海苔として製造する工程に渡って、大量の真水が必要となる。こうして生業である採藻業も袖志の水の利用と共に発展した。

●食文化を支えた水

豆腐づくりも酒造も良質の水が不可欠であった。かつて西川の近くにあった豆腐屋では湧き水であるシミズではなく、西川の水を利用していたという。西川は集落内にある5本のカワの中でも、「病気の時には西川の水が良い」とされていたほど、人々に評価された水質の高い川であったことが知られている。

●コモンズを支えた水

イネを共同で管理したり、カワの水に関しても洗うものによって使う水場が決まっている。そのようなコミュニティで守るべきルールが浸透しており、またそれを守ることで共同意識「コモンズ」を育んできた。

●文化的景観

現在の中川は舗装整備によってその姿を変えてしまい、また旧道沿いにあったイケも見られなくなっている。現在では西川のみが風情ある景観を残し、袖志における水場の原風景を醸し出している。往時において、まさにシミズ、カワ、イケ、イネの水場が人々のアメニティー空間であり、文化的景観として機能していたことがうかがえる。

●水とのかかわりを軸とした空間概念

袖志は室町時代、20数軒の家が中川周辺に点在していたと言われている。その中川を中心として集落は拡大し、ニシ、ヒガシの概念が生まれたようである。一方、カミ、シモという概念は空間を指すのみでなく、「シモの水は使わない」「上田（カンダ）にはシミズが湧く」というように水の利用と深く関わってきた。このように袖志では、水を中心とした空間概念が人々に共有され、現在まで使われている。



ご清聴ありがとうございました